

エンリーコ・オノフリの無伴奏CDを聴いた。彼の演奏には2009年と最近の2010年10月のコンサートで接していて、昨秋の演奏会は大変すばらしく、特にコレッリのラ・フォリアが音楽的には深く、そして技術的には最高の名人芸で圧巻であった。このCDの冒頭に収録されているJ.S.バッハのトッカータとフーガBWV565も当夜演奏され、その解釈は真摯かつ刺激的で強く印象に残った。彼の演奏の水準は極度に高く、私は個人的には特にイタリアの作品の解釈に全面的に賛同する。しかし、ビーバーやテレマン等ドイツの作品も大変秀逸で脱帽せざるを得ない。

彼の演奏は、従来「これがバロック奏法だ」と言われてきたものとはスタイルを異にしている。それは一言で表現するならば直裁的で一貫性があり、修辞法を重んじている。言い換えれば客観性に富んでいるのだ。演奏とは元来主観的なものであるにも拘らず、彼がどんなに個人的な独創性のあるアイデアをもとに演奏しようと、彼の視点は絶対にブレることがない。それ故、聴者には時折決して平易ではないが、客観的印象をもつことが可能となる。それは弦楽器奏者としての立場から見ると、まず彼の音色が最弱音もまた最強音でも大変美しいこと。音に芯のあること（従来のバロックヴァイオリン奏者の多くが「バロック奏法とは捉えどころのない、輪郭の曖昧な、ふわふわした空洞的に響く音で弾くべき」と心得ていたようだが、それが誤りであることがオノフリの演奏によってはっきりした）そして、弦楽器奏者として最も重要である音程（ピッチとイントネーション）の正確さだ。それに加え速いパッセージでの左手の機敏さと、ボーイングに関しては細かく速い動きと複雑な移弦の技術の完璧さによる、このような高い技術の裏付けがあって初めて、前述のアーティキュレーションが明瞭な客観的な演奏解釈が可能になる。

彼が今後もし日本でも、自身の演奏や教育的な、奏法そのものと楽曲解釈の視点を主眼とするセミナーを行って、イタリア的バロック演奏をさらに明らかにしてくれるチャンスがあれば、バロック奏法の専門家を目指す者たちに加え私のようなモダン楽器奏者でクラシック全般に亘って解釈の正当性を探究する者にとって、この上なく有益なことであると感じている。なぜならば、バロック音楽はいわゆるウィーン古典派よりも一層客観的で、ロマン派音楽のように個人の感情が重んぜられるものではないからだ。対比せられるものが明らかにされることによって、その対極にあるものの姿もくっきりとしてくるのだ。

心あるメセナの精神を發揮し、我々日本の音楽界だけでなく、世界的な見地から価値のある行動を成し遂げて下さるご支援を切に希むものである。